
雪

春月桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪

【Zコード】

N5173C

【作者名】

春月桜

【あらすじ】

主人公の雪道霧の中学校に転校生がやってきた…

第1話

雪

1、紹介

私は、ゆきみち雪道みぞれ霧。

田はちょっとだけ茶色が混ざっていて、髪の毛は後に一つで結んで、ポニーテール。

黒髪に、ちょっと茶髪がある。

バリバリ日本人です。

私は女なのに、ロマンチックなことなんか考えたことがない。

女の子はみんな普通は好きな人とか、かつこいい人とか、女の子ってなにかしら可愛いことを考えるのに、私は今にもなつて、好きな人なんてできない。

まあ、言葉をもつと簡単な言葉でいたら、「恋に鈍感」つていやつよ。

そんな私は今中学一年生…つらい。

中学一年にもなつて彼氏がないのは、私ともう一人だけ、その人は学年トップの成績の星月さつき由梨矢ゆりやという子、近づきがたいオ

「つを感じる子。

みんな友達を見ていると男といチャイチャ、すつじくムカつく。

でも、結局は私が鈍感なだけ。

みんなをせめちゃいけない。

私も、彼氏がほしいと思つ。

でも、好きになれるやつがない。

みんなつまんないんだもん。

多分、私の好きになる人はハードルが高い。

この世に、私の好きな人なんていない。

そう、私は思つ。

2、転校生？！何故こんな時期に？

キーンコーンカーンコーン…

一時間目の始まりのチャイムがなつた。

ガラツ

教室のドアが開いた。

そして、先生が入ってきた。先生が…

「おはよー。」

先生は大きな声で挨拶をしてくる。

そして、クラス全員がかえしていく。

ここまでは、いつもと同じ、だけど、次からいつもと全然違う話をされる。

「今日は転校生がきているー。」

先生が笑顔で言った。

「先生、それは、男ですか、女ですかーー！」

一人の男子が立つて先生に聞いた。

「それは、入つてからのお楽しみ。さあ、入つて来い。」

先生は呼んだ。

ガラッ

教室のドアが開いた。

スタッスタッスタッスタッ…

『 もやーーー。』

女の子の私と黒田さん以外みんな声をあげた。

「 ひるやこーだー。」

先生が注意した。

(だれでもいいのかよ?)

私は心中で女子達に言つてこた。

「 桜杉 厚樹さくらじん あつきです。よろしくお願ねがいします。」

桜杉君はかつこいいけど何か物足りない気がする。

私は目まが一瞬だけ、合つた気がする。

(何か…彼女 彼女いそうだな。)

私は心中でちょっとだけがっかりした。

「 じゃあ、雪道の後だな。わからないことがあつたら雪道か、隣の
やつにわけ。 」

先生は桜杉君に笑つて言つた。

「 はー。 」

スタスタスタスタ…

ガタツ…

「かつこよくない？」

女の子一人が話していた。

「うん、超好み。」

それを、桜杉君が聞いていたみたいで笑った。

私はゾクッとした。

(今、冬なのに、こんなときに引っ越してくる人っているんだ?)

私はそう心の中で思つた。

キーンゴーンカーンゴーン…

行間休みになつた。

女の子たちが一斉に桜杉君のほうにきた。

私は押しつぶされそうになつた。

はあー。

「くすくす。」

「ん？」

どうからか笑っている声が聞こえてくる、見渡したら、皇月さんが笑っていた。

「な、何で笑ってるの？」

私は皇月さんに聞いた。

「だつて、押し出されて、ため息つくんですもの。くすくす。」

皇月さんは見たことのない笑顔で笑ってくれた。

「ねえねえ、私、皇月さんのこと由梨矢つよんでいい？」

私は聞いた。

「え?、あ、うん、いいけど。」

由梨矢は笑顔で言つてくれた。

「じゃあ、私のこと雲つて呼んで。」

私は元気に笑顔で言つた。

「うん。」

由梨矢は嬉しそうな顔をして言つた。

私は自分の席に戻るのはいやだから、図書室に行くことにした。

ガラツ

教室のドアを開けた。

ピシャツ

ドアを閉めた。

すたすたすたすた…

真っ直ぐいって七番田の教室が図書室だ。

あいかわらず静かで、でも、さみしくない。

だつて、本がいっぱいあるから。

私はよく、図書室に来ることが多い。

ガラツあまり人がいないのに、図書室のドアが開いた。

私はふりむくと桜杉君がいた。

「え？ 何で？」

私は人が少ないので「ここにいるのか、気になった。

「別に、ただきただけだよ。」

桜杉君は「ガラツとしていつてきた。

「図書室よくくるの？」

桜杉君は私に聞いてきた。

「うん。本つて読んると落ち着くし、いろんな世界につれていってくれるじゃない？私はそこが好き。」

私は本を手に取りながら言った。

「ふーん、なんかロマンチックだね？」

桜杉君は椅子に座りながら言った。

「やうかな？私はロマンチックなことなんて何も言えないから、そりゅうのは鈍感なの。」

私は本ながめてどれにしようか悩みながら言った。

「意外とロマンチックだったりしそうだね？見てる限りでは。」

桜杉君は本をとつて言った。

「桜杉君つて……」

私が言いかけた。

「厚樹でいいよ？」

桜杉君は本を読みながら言った。

「厚樹ひでぞ、彼女とかいそつだよね。」

私は大胆のもほじがあるひでぞうい恥ずかしこじとを言つた」と
を今思つた。

カアー

顔が熱くなつた。

「くすくす。いないよ？ 彼女なんて。女つてチョロイよな。」

私は厚樹から出てきた言葉がカチンときた。

「じつめいじよ？」

「だから、女なんて簡単にひつかかるから、暇つぶしにはいいんだ
よ。」

バンッ

私は思いつきり厚樹の頬をたたいた。

「いつてー、なにすんだよー！」

厚樹はむきになつて怒つた。

「最低よ。あんたからそんな言葉が出るなんて信じられないー！女
を暇つぶしにつかうなんて、最低ーー！」

私は言つだけ言つて出でてしまった。

「何だ？　あいつ。」

厚樹は叩かれた頬をなでながらつぶやいた。

何故かくやしい。

見透かされたみたいで。

私は頭に手をかざしながら、涙目をかくした。

ガラツ

私は教室のドアを開けた。

私は泣きそうになりながら、自分の席に座った。

「ねえ、ねえ、桜杉君しらない？」

一人の女の子が私に問いかけた。

(何で私があいつのことしつてなくちゃいけないのよー。)

私は腹をたてながら、言つた。

「図書室にいたよ。」

私は我慢しながら、笑顔で言った。

「あつがどうぞります。」

一人の女の子はすべく喜んで言った。

「あいつのビニがここなの？」

私は聞いてみた。

「え？ ビニって、かつこないじやないですか。クールで、優しくて、ノリがよくて。」

女の子はいかにも、「桜杉君が好き。」と言ひきるような恋します顔で、返してきた。

「ふーん。案外ひどい人だつたりして…。」

私はつい本音を言ひてしまった。

「そんなひどいだなんて。」

女の子は悲しそうな顔をしながら、私に怒ったような口調で言つてきた。

「つむだようわ。」

私はヤバッと思いながら賢明に嘘のことを言つた。

「囊、ちゅうとつをあつて。」

私は由梨矢に無理矢理腕をつかまれて引きずられながら、教室を出た。

「霧、あなたあの言つた言葉本氣でしょ」今へ

由梨矢はちょっと真剣な目になって、話しかけてきた。

「え？ 何で？」

私は何も言えなくなると思い必死にこの言葉を出した。

「囊、」のことは誰にも話せなことやつてたんだけど…仕
方ない。」

私は由梨矢から話を聞いた。

「アーティスト」

私は大声をあげてしまつた。

卷之三

由梨矢は指を立てて口にあてた。

「あ、ごめん。でも、本当?! 由梨矢と厚樹がつきあつてたって？」

私は思わず聞いてしまった。

「うん。全部本当の話。」

由梨矢はうつむいて、思い出すよつて話はじめた。

「私達はつきあつてて、みんなに言われたわ。何であんな地味な女とつて、みんなに言われた。私はそれが怖くて、死のうとも思ったこともあるほど女は怖いって思つた。私は、でも、厚樹が好きだつた。いつも、みんなに好かれて、青春真っ盛りつて感じで、私があこがれてた。でも、告白されたときはびっくりした。だつて、考えてみなよ、私があこがれてるやつに告白されたんだよ?。思つた以上驚きだつた。でも、ある日聞いてしまつたの、私はいつもように教室の前にきた。ここまではいつもと同じだつた、でも、何故かその日はちがかつた。

「あんなの好きなの?厚樹つて、嘘でしょ?」

女の子達が厚樹の話しかけたみたいで、

「んなわけないじやん、あんな地味なの本当の好きになるわけないじやん。あはははは。」

厚樹は笑いながら軽く言つたわ。そう聞いたとき私は泣いたわ。くるしくて。それから私は恋をしなくなつたわ。また、だまされるんじゃないかつて。だから、私のことを本当の好きになつてくれる人に出会つたら、付き合つことにしてるの。」

由梨矢は遠くを見るよつてな目で、窓を見上げた。

「でも、すじいわね雲。」

由梨矢は笑顔で私に言つてきた。

「何が?」

私は何がかわからなくて聞いてみた。

「初めてでわかっちゃうなんて。」

由梨矢は苦しそうな声で私に言つてきました。

「さつき私のなかつたでしょ？」

「うん。」

「そのとき」あの厚樹にあつたのよ。ひどい言葉をきいたわ。女は軽いって、暇つぶしにまちようどいって。」

私はムカつきながらも言つた。

「どうで聞いたの？」

由梨矢はたずねてきた。

「え、図書室だよ。それが何か？」

私はポカンとした顔で聞いた。

「ううん。なんとなく。」

由梨矢は隠しているような顔で言つた。

「ふーん。でさ、何で。前から、知つてんの？厚樹のこと。引っ越してきたんでしょ？」

私は首をかしげながら聞いた。

「え？ 一年のときここにいたのよ。それで、知つてんの。」

由梨矢はちよつとだけ笑みをこぼして言った。

「ふーん。」

私はちよつと小さくなつて言った。

「そりが、厚樹がそんなこと言つてたんだ。」

由梨矢は苦しそうな顔をしていた。

「私は絶対にあいつを信じない。」

「え？ 私そこまで言つてないよ。」

由梨矢はびっくりした顔で、言った。

「うん。由梨矢のせいじゃないよ。私が勝手に決めたこと。ずっと、
由梨矢を信じてるよ。」

由梨矢は泣きそうになった。

「泣かないでよーあははは。」

私は少しだけからかった。

「だつて、だつて、霧がー…」

「あははは。」

いつもして、ちょっとだけ大人の時間をすきでいったのでした。

ガラツ

私達は教室に入った。

田線は一気に私達のまわりに向かってきました。

「え？ 何？」

私はみんなを見ながら言つた。

「ちょっと、霧にさしかけてくれない？」

女の子たちが集団で私のことを呼びかけてきた。

「え？ いいけど。」

私は一瞬ゾクッとしてしまった。

ガラツ・ピシャツ

「ちょっと、何すんのよ、やめて、いたつ、何すんのよーーー。」

びくつ

(何?)

くすくす。

「なんなの？ 何で笑ってるの？」厚樹。

由梨矢は怖がりながら聞いた。

「ん？ 何でってたのしいから。女って面白いよなあんな単純なこと
であんなことするんだもん。くすくす。」

厚樹は笑いながら言った。

「何て言つたの？あの子達に。」

由梨矢はおそるおそる言つた。

「あいつにぶたれたって言つたんだよ。そしたら、「私達で厚樹君
を守るー」とか言つちゃつてさ。あんなことになつてるの。面白い
じゃん。」

厚樹は笑いをこらえながら言った。

「え？ ぶつたの？ 霊が？」

由梨矢はびっくりした顔で言った。

「ああ、ほら、後。赤くなつてるだろ。」

厚樹は左の頬を指差しながら言った。

本当に赤くなっていた。

「痛いってばーー！」

廊下から大きい声が聞こえてきた。

「囊…。やめさせ…、今すぐ。」

由梨矢はこぶしを握り締めて言った。

「へー。根性少しさはよくなつたじやん。前とはちがつて。おーい、みんなこいつの方もいたぶつてほしつつよー。」

厚樹は笑みをこぼしながら言った。

「はーい。おとなしくしてるよーー！」

ガニツ

ガラツ

「どの方がいたぶつてほしいの？」

一人の女子が言った。

「この人。」

厚樹は由梨矢のほうを指差した。

「へー。学年トップの学力だからっていい人ぶつてると痛い目みる
んだよ？」

一人の女子が棒ふりおろした。

ガツッ

音がした。

「え？」

バタッ

倒れた・・・・・ 霊が・・・・・

第2話

第2話

「嘘だろ？」

様子を見ていた男子が一人腰をぬかした。

「え？ マジ？ 頭から血出でんじやん。」

男の子がもう一人言つた。

『 きやーーー！』

女の子達が悲鳴をあげた。

「 霧？ うそだよね？ 嘘つて言つてよ。 ねえ、さつきみたいに元気に話してよ。 霧。 霧ー。 霧ーーーーー！」

由梨矢は泣いて呼んだ、私のことを。

「 由.. 梨矢。 泣かないではあ、はあ、はあ、泣いちゃ可愛い顔が台無しだよ。」

私は由梨矢が悲しまないよつこと笑顔で祈りながら言つた。

「 霧。 お願ひ。 しゃべんなくていいからもう、しゃべつちやだめだ

よ。血が出ちやうから。」

由梨矢は泣きながら言った。

「何で。そこまでするんだよ。友達に。何で命かけてまで友達を守つたりするんだよ。」

厚樹は怒っているような顔で私に言つてきた。

私はふらふらしながら立ち上がつた。

「あんたは、厚樹は自分が助かればなんだつてやつていいなんて思つてるみたいだけど、友達は金ではかえない。一生のかけがえのない人なんだよ。どんなに自分が傷ついてたつて、どんなに自分が苦しんでたつて、友達を傷つけてはいけないんだよ！－！－はあ、はあ、はあ、あんたにはわからぬでしううね。女も、男も、暇つぶしにつかつての最低なやつなんかにわかんないだろ？けどね！－！－！」

ズキッ

「くつ。」

ガクツ

「霧？！」

由梨矢は泣きながら心配した。

「大丈夫だよ。」

私は笑顔で言った。

「疲れちゃった。眠つていい? 由梨矢、足かして。」

私は疲れ果てて言った。

「うん、いいよ。」

由梨矢は涙をこらえて笑顔で言つてくれた。

「ありがとう。」

私はゆっくり田を開じた。

私も由梨矢も厚樹も、みんなわからなかつた……

私の命はここで360度回転してしまう」と……

第三話

第三話

私はすぐに病院に運ばれた。

「頭部から大量出血してる中学生一人です！すぐに緊急オペを！先生！」

看護士さん達が大きな声で先生を呼びかけた。

苦しい頭の痛みの向こうから聞こえてきた。

「霧！霧！私待ってるからずっと待ってるから。笑顔で戻ってくる時まで待ってるから、何日でもかけていいから。絶対もとの笑顔のままで帰って来てね？！」

由梨矢の声が聞こえた。

痛みにたえながら私は笑顔で由梨矢に言った。

「ありがとう。」

私はそう言い残して、手術室に入った。

(お願い、霧、笑顔で戻ってきて！)

由梨矢は祈つた。

教室にいた。

みんなも、いそいでかけつけてきた。

ガー…

ドアが開いた。

「どうなってる? 霊。」

息をきらしながら霊をぶつた人が言った。

「どうなってるですか?! あなたが、あなたが霊を傷つけたん
でしょ??!!」

ガツ

由梨矢は霊を帚でぶつた女の子の制服の襟をつかんで、苦しい顔
を近づけた。

「やめろよ。いいで、喧嘩したって、雪道が困るだろ?!!?!!」

一人の男子が言った。

そう、その男子はあの、厚樹だった。

「厚樹、あんた、自分が言つてることわかってる?!! 元はと言えば
あんたが原因なんだよ?!! 返してよ!! あの元気だった。霊を返して

よーー！」

由梨矢はつらがつてゆくとしゃがみこんでいた。

『……。』

みんなは黙つてしまつた。

由梨矢は泣いていた。

ガー…

手術室から先生（病院の）が出てきた。

「先生霧は？ 霧はどうなつたんですか？！」

由梨矢は必死に落ち着かない様子を隠しながら先生に聞いてきた。

「おちついてください。大丈夫です。息もしつかりしますし、心拍数も正常です。安心してください。」

先生は由梨矢の肩を軽く叩いた。

「よかつた。」

みんなは一斉にため息をついた。

「雪道さんのお母様、ちょっとお話を、ちょっとこれからおきてください。」

先生は囊のお母さん達を違つとじろて案内した。

由梨矢はそのとき嫌な予感が頭の中をよぎった。

窓の外は雪が降っていた。

ちらちら落ちる雪は桜のよしきれいで何かを占えよつとしてるのかもしれないと思つてしまつほど切なくて。

苦しい。

由梨矢は窓の外を苦い顔で見ていた。

(ねえ、囊、帰つて来るよね?。笑顔で、帰つて来てくれるよね?)

由梨矢は心の中で何度もこの言葉を繰り返していた。

翌日：

私は病院に入院していた。

お母さんはいつもとちょっとちがくて、

何故か苦しそうな顔を隠していた。

私はすぐにわかった。

だつて、十四年間も一緒にいるんですけど、わからないわけないでしょ?

「ねえ、お母さん、何か今日は元気がないね? ビーブしたの?」

私は元気のないいつもと変わったお母さんに優しく声をかけた。

「な、何でもないのよ。ちょっと、寝不足なだけ。」

お母さんはつらそうに顔を笑顔に変える。

「そう、それならいいけど。」

私は心配かけないよ!と言つた。

だつて、泣きやうなんだもん。

お母さんが…。

思つたら私もつらくなつた。

ガラツ

急に病室のドアが開いた音に私はビックンとしてしまつた。

「失礼します。」

ドアの向こう側から出てきたのは、コチとした顔で入ってきた由梨矢だった。

「どうぞ。」

私は軽く笑顔で言った。

「じゃあ、また来るわね。」

お母さんがガタツと席を立つた。

「すみません。」

由梨矢は本当にすみません顔で頭を軽くさげた。

「いいのよ。ゆっくりしてつてね。家じやないけど。」

お母さんは作った笑顔で、由梨矢に言った。

「はい、ありがとうございます。」

由梨矢も、ちょっとだけ、作った笑顔で言ってるよくな気がした。

「じゃあ。」

ガラツ・ピシャツ。

ドアが開いて一気にしまった。

由梨矢は私のほうに向き直した。

「調子は大丈夫?」

由梨矢は私に心配顔で聞いてきた。

「うん、大丈夫。」

私は元気に顔を笑顔にした。

そして、つけたして、ピースをした。

「よかつた。」

由梨矢はホツとしたみたいで、イスに腰をかけた。

「「めんね。私のせいだ。」

由梨矢は苦しそうに顔をしかめた。

「ううん。由梨矢は悪くないよ、変なふうに罪をつけとめたのが悪いんだよ。自業自得つてやつよ。」

私は由梨矢の痛みを少しでも、やわらげてあげたくて、そう…祈りながら言った。

由梨矢はその言葉を聞いて、目を瞑るませた。

「な、泣かないでよ？ 由梨矢ー。」

私はやわらぐよつにやつたのに…。

「だつて、そんなこと言つてくれるなんて思つてもいなかつたから。」

由梨矢は泣き声になつながら、私に言つてきた。

「あはははは、由梨矢って泣き虫だ。」

私は楽しくするため言つた。

「もへ、霧のバカ！」

由梨矢は目を手で隠しながら、笑つて言つた。

そのときの由梨矢は可愛くて、愛しいぐらゝ女子で、いいなつてちょっとだけ思つた。

由梨矢はすぐに泣き止んだ。

「霧、ずっと友達でいてくれる？」

由梨矢は真剣な顔をして、黒く住んだ色の目を私の真正面に向けてきた。

「うん。ずっとといってあげる。ずっと、由梨矢の心の側にいつもいるよ。」

私は今までになかつたような満面な笑顔で答えた。

「よかつた。」

由梨矢はホッとしたような顔をした。

「私は、由梨矢が大好きだから、大丈夫安心して、私が、もし、この星から消えたって、私は

由梨矢の友達だよ。」

私は笑顔で言った。

「私、一番の友達？ それとも、親友？」

由梨矢は私の目をじいーっと見てきた。

「え？ 親友と一番の友達って同じじゃない？」

私は首をかしげながら私は尋ねた。

「え？ あ、そうか。」

(以外に天然?)

「まあ、親友だね。私の一番の友達だよ。由梨矢は。」

私は由梨矢の顔を覗き込んだ。

「よかつた！ えへへ。」

由梨矢は照れながら頭をいた。

「かわいいー。由梨矢。」

私は由梨矢をぎゅっと抱きしめた。

「もう、からかわないでよー。」

由梨矢はちょっとだけ笑顔で、怒った。

私達は一時間ぐらい、話をした。

その時間はかけがえのない時間となつて、私の心のアルバムにしまつた。

「写真みたいに。」

綺麗に保管する。

ズキッズキッズキッ…

（い、痛い！）

頭が痛くてたまらない。

痛い痛い痛い痛い…ずっとその言葉が私の頭の中を蝕んでく。

私はナースコールをおした。

たえられない。

ガラツ

病室がのドアが開いた。

「どうしたんですか？雪道さん。」

看護士さんが私に呼びかけた。

「頭…が…痛いんです……うつ。」

ズキズキズキズキ…痛い！！！

「誰かーー、先生を呼んでーーーーー！」

看護士さんの声が病院の廊下に響く。

私はなんとか、その言葉は聞こえたけど。

もう、それから、どう運ばれたのか。

どう処置しても、うつたのかは覚えてない。

ていうよりわからぬ。

田が覚めたら、一日中寝ていたらしい。

「お母さん？」

最初に田にはいったのは、私の手を握り締めていたお母さんだった。

泣きそづなじょっぱい顔をして握り締めていた。

何かを祈りながら。

「あ、やっと田が覚めたのね。」

お母さんは一気に明るくなつた。

目がウルウルしていた。

「うん、大丈夫？お母さん、ずっと一緒にいてくれたんじゃないの？田の下にクマができるよ？」

私はつらうなお母さんに優しく声かけた。

「うん、ずっと一緒にいたから。安心して寝てたと思うわ。体調、大丈夫？」

お母さんは顔をちょっとだけゆがめて言った。

「うん、すくべ元気だよ。」

私はお母さんに氣をつかいながら笑顔で言った。

「やべ、よかつたわ。」

お母さんは眉毛をひょいとだけよせて笑つた。

「また、夕方くるわ。体調がおかしくなつたら、ちやんと看護士さん達を呼びなさい。」

お母さんは、心配そうに顔をしかめながら言った。

「うん。」

私は笑顔で言った。

ガラツ

病室のドアは開き、そして、閉まった。

私は病室で、静かに寝ようと思つた。

でも、一日中寝てたからか、全然寝付けない。

しようがないがら天上の壁をキャンバスと思つて何かを描こうとした。

まつ毛きに出てきたのが…由梨矢の笑顔だった。

「そうだ！いいこと考えた！」

私はお母さんが買つてくれた落書き張を開いて、クラスみんなの笑顔を描いた。

先生の顔も描こう。

みんなを描こう、誰一人ぬけることのないクラスなんだよ。

私はみんなの似顔絵をかいだ。

すらすらと手が動いた。

私はそれを完成させた（十五分間の間に）。

私はそれを見て、みんなに逢いたくなつた。

「この子とはこんなことがあった。

あの子とはあんなことがあった。

全部よみがえつて來た。

「みんなー、逢いたいよー。」

私は思わず言葉にしてしまった。

その時いきなり、病室のドアが開いた。

「！？」

私はビクッとした。

「えへへ、みんなで来ちゃつた。」

由梨矢と、クラス全員が入ってきた。

「ちよつ、何？いきなりー。」

私は引きずつた顔で、言った。

「あはははは、霧泣いてたみたいだね？」

由梨矢はからかつてるように言いながら私の頬のついつてる涙をハンカチでふきとつてくれた。

「からかってるでしょー。」

私はちよつと怒つて言つた。

「あはははは、逢いたいって言つてたの誰よー。」

由梨矢はお腹をかかえながら笑つた。

「聞いてたのー？！？」

私は顔を赤めながら言つた。

顔が熱くて熱くてたまらなくなつた。

「あはは、顔真つ赤ー。」

「あんた、本当にちよつてるでしょー？」

私はムカつきながら言つた。

「まあまあ、みんなで来たんだから、いろいろ」と話題へ。

由梨矢はちよつと笑顔で言つた。

「まずは、あやまつてもらおつか？厚樹達？」

由梨矢はちよつと怒りながら言つた。

(以外に迫力があるな…)

私は由梨矢の顔を見ながら心の中で思った。

女子五人ぐらいた、厚樹が出てきた。

「じめんね、霧。」

女子達が言つてきた。

「じめん。」

あつけない終わりの言葉。

でも、そこもまた厚樹らしいと。

「暇つぶしにするのは、これでこりた？」

私は首をかしげながら聞いた。

「ああ……。」

厚樹はまつむいた。

「これで、もしかしたらこうなる」ともあるてことをわかつてほしいな。」

私は厚樹の顔を覗き込んだ。

「うん。本当にじめん。」

厚樹は苦しそうに顔をしかめながら言つた。

「許すよ。」

私は真剣な顔をして言った。

「ありがと。」

私と厚樹達と仲直りした。

いつぱい話した。

いのんなこと。

先生も一緒にいて楽しく会話がはずんで楽しい。

もつと話したかった。

でも、もひ、いろんな機会は無くなってしまったんだ。

私は思にもしなった。
こんなこと……。

第4話

第四話

ガラッ

いきなりドアが開いた。

ドアの外からは病院の先生が入ってきた。

「どうしたんですか？先生。注射の時間じゃないですよね？」

私は聞いた。

「雪道さんのお母様達はもう、知っているのですが。雪道さんは知らないことです。みなさんも、知る権利があります。」

私は考えもしなかった。

辛い現実が待ってたなんて…。

「これから、お話しすることは、一回だけしか言えませんから。私は荷が重くて。雪道さんの脳に脳腫瘍がでています。雪道さんの寿命は、多くて、一ヶ月しかもたないでしょう。」

先生はつらそうな顔をして、私達につらい現実をつきつけてきた。

「そんな。」

私は苦しく何か「みあげてくれるものをおねがいする」と口元をあわえた。

(「、気持ち悪い。」)

「すみません、ちょっとトイレ。」

私は病室のベッドからおりた。

すたすたすた…

私は思わず吐いてしまった。

(「すいじへ、気持ちが悪い。」)

「すみません。急に。」

私はまた、病室にもどつた先生の「いつ」とを聞くよくなかったりで、病室のベッドに座つた。

「あの雪道さんはトイレに行つたけど何でだい？」

先生が私に真剣な目で聞いてきた。

「え？ ひみつと気持ち悪くなつて。」

私は正直に言つた。

「 そう、その脳腫瘍つていつの頭痛や吐き気がしたり普通ではありえない病的反射をおこすこともあります、手足がしびれたり感覚がにぶくなつていくんだ。つらいと思つよ。私には、すごく荷が重くて、すくへつらうんだ。精精後悔しなによつにしたほうがいい。」

先生はつづむきながら、私達に話した。

みんなは辛そうな顔をしていた。中には泣きそうな女子達がいっぱいいた。

「みんな、泣かないでよ。」

私は辛そうな顔をしているみんなをはげました。

現実はつづい。

私は先生に現実をつづけられたときつて思つた。

(なんで、世の中つて意地悪なんだろ。)

私は泣きやうになつた。

「先生、脳腫瘍は手術して、治せないんですか？」

言つ出したのはあの、厚樹だった。

「手術は私の手では、百パーセント中、たつた、一十パーセントしか確立がないんだ。」

先生は苦しそうな色の目をして、少しかすれた声で言つた。

「そんな。」

厚樹はうつむいた。

「つまい人でも、六十パーセントしかないんだよ。一応、手術はできるけど、もっと大きい病院に入院してもらうしかないな。」

先生は深い色の目をして、今にも死にそうなぐらいい顔色が悪かった。

「先生、俺の父さんならできるかもしません。父さんは病院を経嘗してて、今、由紀元病院のドクターをしているんです。」

厚樹は必死に言った。

「それなら大丈夫かもしれない、由紀元病院では、きっと、道具もそろつてるだろうじ。たのむよ、君のお父様に相談をしてみてくれ。」

先生はすぐに明るくなつた、多分荷物をおいたんだ。

「はい、がんばって、父さんにたのんでみます。」

厚樹は真剣な顔をして言った。

覚悟をきめたかのよつこ。

「大丈夫？ 厚樹。」

私は辛くて言つた。

「何で。お前がこうなつたのも俺のせいだし。」

厚樹は自身ありげに言つ。

「いや、鼎でぶつたつて言つたね。多分出血したのはそのせいだと
思うけど。多分雪道さんは前からなつてたよ。だけど、病院に來
るのが遅かつたみたいで、もう、手遅れなんだ。」

先生は冷静な目で私達に言つてきた。

「そうだつたんですね？」

厚樹は少しホッとしたようにも見えた。

「でも、助けてます。」

厚樹は覚悟をきめたように真剣に言つた。

私は何故か浮かない顔をしていた。

だって、本当に浮かない気持ちがあるから。

全部、厚樹のお父さんにまかせたら、厚樹のお父さんは責任重大
になつて、辛いと思う。

「期待なんかさせないほうがいいよ。」

私は真っ黒な目をして言った。

暗闇に落ちたような目をしていたに違いない。

「何言つてんだよ？お前生きたくねえーのかよ？！」

厚樹は黒くすんだ目を私にむけってきた。

その黒い目は綺麗で、私は目を合わせることができない目だった。

「生きたいよ！でも、厚樹はよくても、厚樹のお父さんは責任重大なんだよ。医者になんか絶対つて文字はないんだよ……厚樹のお父さんのことも考えてあげなよ。」

私は暗闇に落ちたみたいな目を厚樹にむけた。

私の瞳には厚樹が映る。

「確かに絶対つていう文字はなくとも、奇跡つていう文字がある…！」

厚樹は私に少しだけ顔をちかづけた。

必死な目だった。

「じゃあ…奇跡つていう文字に運をまかせりつてこのの？…」

私は泣きそうになつて必死に言い返した。

だつて、死にたくないのなんて当たり前の」とじやん。

なの」…。

「…。とにかく、父さんいたのんでみるから、あきらめんなよ。」

厚樹は優しく、私に言った。

「……。」

私は浮かない顔でうつむいた。

「とにかく、厚樹君がお父様にお話してくれるんだね?」

先生が困り顔で私達に言った。

「はい、絶対に話します。」

厚樹はキリッとした声で先生に顔をむけた。

「じゃあ、たのむよ、厚樹君。」

先生は厚樹の肩をポンッと軽く叩いた。

「はい。」

厚樹は真っ直ぐに先生の顔を見ていた。

「じゃあ、失礼。」

先生は少しだけペ「ひとつお辞儀をして、病室を出でいった。

ガラツ・ピシャツ

病室のドアが開きすぐに閉まつた。

「じゃあ、そろそろ俺達は帰るよ。」

先生が言つた。

「はい。」

私は少し笑みをこぼして言つた。

「私はもう少しじこにいます。」

由梨矢は先生に言つた。

「ああ、いいけど、お前もあんま長くはいるなよ?」

先生が心配そうに顔をしかめながら注意した。

「はい、そうします。」

由梨矢は笑顔で言つた。

ガラツ…ピシャツ。

あんまり早くはドアは閉まらなかつた。

ほぼ全員が出るのだからそりゃそうだ。

「大丈夫なの？家。」

私は由梨矢に顔をむけながら言つた。

「うん、一応、遅くなるとは言つといたから大丈夫。」

由梨矢は笑顔で私に答えてくれた。

私はちょっと落ち着いて、心がやすらいだ。

「あんな厚樹、見たことなかつた。私。」

由梨矢は急に話し始めた。

「え？」

私は首をかしげながら聞いた。

「厚樹があそこまでに必死になつてゐるの、はじめて見た。」

由梨矢は窓の外を見た。

「ふーん。」

私は半信半疑で言つた。

「それだけ？」

由梨矢はビッククリ顔になつて言つた。

「え?」

「もうー。」

由梨矢はちょっとだけ怒つたよつこ、言つた。

「じめんじめん。」

私はちょっとだけ笑つた。

「厚樹は、多分、本当に靈を助けたいんじゃないかな。」

由梨矢はまた、窓のぼりをみながら言つた。

厚樹を思ひ出すよつこ遠い田をして。

「何で、そこまで、私のためにしてくれるんだひつこ。」

私は由梨矢に聞いた。

「教えてくれたからだよ。友達の大切さ。」

由梨矢は私の顔を真つ直ぐに見つめて言つた。

「え?」

「だから、前に言つたじやない。頭から血流してるとかこ。」

由梨矢の目は少しだけ光っていた。

「あ、あの時の言葉?」

私は首をかしげた。

「それから好きってことも考えられるわね。」

由梨矢は私にニヤツとして、意地悪そうな顔をして言った。

「もうーからかわないでよーー。」

私はちよつと怒つて言った。

「わかんないじやない。本当かは。」

由梨矢は冷静に言った。

「由梨矢は厚樹のこと今でも、好き?」

私は由梨矢の目を真つ直ぐに見た。

「え?まあ、今でも、好きよ。でも、もう、叶わないとのない恋だからいいの。」

由梨矢はまた、窓の外を見つめて言った。

遠くを見るように。

「叶わない恋かー。」

私も窓の外を見つめた。

外には雪がちらちらと降っていた。

「綺麗だね。」

私は由梨矢に言った。

「うん。」

由梨矢は言い返してきた。

私達は少しの間曇つた窓の外の雪を見つめていた。

これからは、あんまりこの景色は見れないはもしけない。

「じゃあ、私も、そろそろ帰るわ。」

由梨矢はイスから立ち上がり、ドアの前に立つた。

「また、明日来るね。」

由梨矢は病室のドアのとつてをもちながら私のほうに振り返つて
言った。

「うん、待ってる。」

私は笑顔で言った。

ガラツ・ピシャツ。

ドアが閉まった。

私はもう、少しの時間しかないのか。

私は曇つたガラスを手でふき、窓の外を見た。

雪は降り続ぐ。

でも、私には綺麗に光る螢のように見えた。

(なんで、私がこんな思い病気になんなきやならないのよー。)

そう思つたとき田から涙が零れ落ちた。

「ひつ、ひつ、ひつく、ひつく…。」

私は泣いてしまった。

私は夜までずっと泣いていた。

気がつかないうちに朝になっていた。

私は、田蓋がはれて赤くなっていた。

「ひどい顔。」

私は病室の鏡の前に立つて、顔を近づけてつぶやいた。

私はずっと寝た。

朝の六時から一時まで寝た。

私は寝てる間、夢を見た。

よりによつて私が死んでしまつた夢だつた。

「ありえない。こんなときこんな夢見つけやつた。怖い。」

私は腕をさすつた。

鳥肌が立つっていた。

(なんどりによつてこんなとき)

ガラツ

病室のドアが開いた。

誰かが入つてきた。

知らない人。

「誰…ですか？」

私はその人に聞いた。

「俺、ここに骨折で入院してる、夜厨喜良都。《 やすき かいと 》って言つんだ、よろしく。」

「俺、ここに骨折で入院してる、夜厨喜良都。《 やすき かいと 》って言つんだ、よろしく。」

黒髪にちょっとだけくせつけがはねてて。

今時のかっこいい人。

「はあ、よろしく…おねがいします。」

私は戸惑いながら言った。

「何歳ですか?」

私は貝都さんに聞いた。

「俺は、十七歳。」

貝都さんは笑顔で言った。

「へえー私十四歳です。」

私は一コツとした。

「君可愛いね。」

貝都さんは綺麗な瞳で、私のほうを見つめてきた。

「そんなに近づかなくても…」

私は顔をひきずりながら言った。

「あ、」めぐ。「

貝都さんは頭を手でかいた。

照れてる。

ガラツ

「囊ー！大ニユース…だよ。」

由梨矢はいいかけて止まつた。

「何で？いるの？お兄ちゃんが…」

「これからおじいことは……

これもまた、辛い現実だ

つたのです……

第5話

第五話

「何でお兄ちゃんがいるのよ?...」

由梨矢は恐れながら貝都さんを揃えた。

「元兄貴にそんな口をいいのかな?」

貝都さんは怖い顔をした。

怖いといつても、何かちがう怖い顔。

(わりあの、貝都さんじゃない。)

私も怖くなつた。

貝都さんは由梨矢に近づいていく。

「いやー、しないでー、近づかないでーーー!」

由梨矢はすぐおびえてる。

「元お兄ちゃんに向かつて、それはないでしょ?」

貝都さんは止まる気配がない。

私は病室のベットから飛び降りた。

バツ

私は由梨矢の前に立つて由梨矢によせないよつにした。

「ん? 何してんの? 霊ちゃん。」

貝都さんは怖い顔をして笑つた。

「作つた笑顔なんて誰でもわかるわよそんな顔!」

私は思い切つて言つた。

「ふーん、ばれちゃつた?」

貝都さんはまた、怖い顔にもどつた。

「怖がつてんじゃん!…由梨矢が!…」

私はどかないようとした。

「ふーん、それが? 怖がつてる顔由梨矢つて本当に可愛いよね?」

貝都さんは私の後ろにいる由梨矢の怖がつた顔を見ながら言つた。

「あんたつて、人の怖がつてる顔が好きなんだ?」

私は笑つた。

「うん好きだけど何か？」

貝都さんは開き直つたみたいに言った。

「そんな怖い顔したって私は怖がらないよ? だって、人を命かけて守れるんだから! !」

私は貝都さんの顔をにらめつけた。

「そうなの? ジャあ、体もかけられる? 人を体をかけて守れる? 」

貝都さんは舌でかわいた唇をなでた。

(怖い。)

私はちょっと足がふるえた。

ガラツ

「よー、いい話持つてきただぞー。ん?」

病室に能天気な声を出して入ってきたのは厚樹だった。

「何やつてんだ?」

厚樹は首をかしげて言った。

「た、助けて厚樹。」

由梨矢がふるえながら声を出した。

「な……にやつてんだよ……」

ガンツ

厚樹は怒ったみたいで、貝都さんを殴った。

「つづめー」

貝都さんは怒ったみたいに厚樹を殴った。

私は力がぬけてきたからしゃがんだ。

「霧。」

由梨矢が私に抱きついてきた。

ギュッ

「大丈夫私がいる。」

私は優しく由梨矢にささやいた。

「怖かった。」

由梨矢は震えた声で私にささやいた。

「うん、私も怖かったよ。」

私は由梨矢にさせやいた。

「ちゅうどじめん。由梨矢。」

私は由梨矢の腕をほどいて、深呼吸を一回くらいして…。

「すー、いい加減にしなさい……………」

私はこれでもかつてぐらい大声を出した。

多分病院の廊下にすゞ響いたと思つ。

でも、止めるためには「れしかない。

私は厚樹の前にきて、厚樹の首に腕を回した。

私は厚樹に抱きついた。

ギュッ

「もう、いいよ、厚樹。」

私は涙を流しながら、小声で厚樹に言つた。

「霧。」

厚樹は苦しそうな顔をして、私をおおむねよつと抱きしめてくれた。

ギュッ

「何？お前ら恋人？」

貝都さんは私達のことを笑つた。

ל' טבת

「あ？」

「うわあ、うひんなんだよーー！」

私はみてないけど、多分」の時の厚樹の顔は怖かつたと思う。
声をきいていても厚樹の怖い顔がわかる。

「皐月、こつちにこい。」

厚樹は由梨矢を呼んだ。

うん

厚樹に少しだけ隠れた。

「 もう もう い う か な い ま で す 」

厚樹の声は病室に少しだけ響いた。

「こんなにいられないよー。」

貝都さんは怒りながら、病室を出でいった。

バンッ

病室のドアを思いつきり閉めた。

「ありがとう。助けてくれて。」

私は厚樹の首にまきつけた手をとつた。

「ああ。大丈夫だったか？ 皐月も。」

厚樹は私に少し答えてすぐに由梨矢に言った。

私はちょっとムツとしてしまった。

でも、よく考えたら私は厚樹のことが好きなわけじゃないからいいか。

「うん。」

由梨矢はその言葉を聞いて満面な笑顔を見せた。

(うれしそう。)

私はその様子をみて心の中でしみじみと思った。

「ねえ、貝都さんって、お兄ちゃんなの？ 何か元兄貴とか言ってたけど……」

私は首をかしげがら聞いた。

「そ、そんな」とはいいじゃん。ねえ、それよりね、いい話があるんだよ…」

由梨矢は何かをかくして話始めた。

「言つてよ、私をたよつてよ。」

私はちょっと泣きそうな顔をかくしながら言つた。

「……うん、わかつた。」

由梨矢はうつむきながらイスに座つた。

厚樹も隣にあつたイスに腰をおろした。

私は病室のベットに腰をかけ上布団を足にかけた。

「私とあの貝都っていう人は兄弟だったの。だけどね、私は信じたくなかったの、なんでかつていうとね。私のことをあの人かいじめる。いじめるつていつたって、子供がやるようなことじゃなくて、その、セクハラみたいなことを毎日されてたの。私、怖くなっちゃつて、お母さんにも言つたんだけど、お母さんには表の優しい顔を見せて、お母さんは私よりも、あの人に信じた。」

由梨矢は腕をさすりながら言つた。

その手はかすかに震えてた。

「怖くて、怖くて。私は逃げ出したわ、お母さんはその人のお父さんと再婚してて、お父さんも、怖いの、兄と同じ顔だから、いつも、笑顔でいるしかなかった、お父さんは顔は同じでも、性格はちがかつたけど。力にはなつてくれなかつたわ。ある日私はおばあちゃんにこの話をしたわ、そしたら、おばあちゃんはわかつてくれた。この子は私が預かるわつて言つてくれて。今はおばあちゃんの家にいる。だから、今は兄にはあつてないけど、まさか、ここで骨折して、入院してるなんて…。」

由梨矢は泣き出しそうになつていた。

震えた手、怖がつてゐる顔、すべてが私にはかわいそうで私は由梨矢の震えた手をギュッと握り締めた。

「私がそばにいるよ。由梨矢、厚樹だつているよ、守つてくれるよ。」

私は、気づいたら泣いてて、笑顔で、由梨矢に言つた。

「ありがと。」

由梨矢は泣きながら私にお礼を言つた。

「いつも、一緒に帰つてやるよ。」

厚樹が笑顔で、由梨矢に言つた。

「ありがとう。」

由梨矢も泣きながら笑顔を作つて言つた。

「あ、雪が降つてゐる。」

私は窓に手をかけた。

桜みたいにちらちらと光つて落ちる。

綺麗でしかたがない。

三人で見た雪は美しく、愛しくて、何でか、胸の中に暗い気持ちがある。

「綺麗だね。」

由梨矢は涙をふいて、窓の外を見た。

「すげー。」

厚樹は窓の外を見て、ポカンとした声で言った。

「でき、何大ニユースつて。」

私は由梨矢に聞いた。

「あ、そうそう、厚樹のお父さんが手術をやってくれることになつたんだつて!」

由梨矢は目を輝かせて言った。

私は厚樹のほうを見た。

「すげーだろ。」

厚樹は指をピース形にして、満面の笑顔をした。

「大丈夫なの？お父さんいって言つてるの？」

私は心配の気持ちでいつぱいになつた。

「うん、できるかぎりはするって。」

厚樹は笑顔で言つた。

「そり…」

私はうつむいた。

「嬉しくないの？」

由梨矢は私の顔を覗き込んできた。

「嬉しいけど…」

私は深刻な顔をした。

「嬉しいのに何で？」

由梨矢は聞き返してきた。

「ちよつと。」

「また、迷惑掛けたくないって言つてーんだろ?」

厚樹はすゝく、早く私の気持ちに気がついた。

「うん。」

私は一人の皿をそらして言つた。

「迷惑なんて考えんな、お前は大事なクラスメートだから、迷惑なんてすきなだけかけられればいいだろ!」

厚樹は私の皿をみつめてきた。

「うん。でも、手術をするには、よっぽど技術がないと。」

私は心配な気持ちで言つた。

もし、私のせいで、厚樹のお父さんが医者をやめる」とになつたら、いやだから。

「大丈夫、俺の父さんはそんなやわな、医者じゃないよ。これでも、技術はうまいほうのもつとうまいほうのやつだから。安心して父さんに命をかけてみな。」

厚樹は優しく私の頭をポンッと叩いた。

あつたかかった。

厚樹の手は私の頭の半分ぐら^いいあつてす"J"へ大きかつた。

"J"ついしてた。

本当の男の子つて感じの手。

私はよくわからない感情をもつてる。

なんでかな、未練なんて残したくないのに。

"じゃあ、そろそろ私帰るね。"

由梨矢がイスから立ち上がった。

"あ、じゃあ、俺も、送つてく。じゃあな。"

厚樹も、いそいでイスから立ち上がった。

"あ、うん、気をつけて。"

私はそれだけ言い残した。

"じゃあね。"

由梨矢はドアのはじつこから顔を出した。

"あ、うん、がんばつて、厚樹のこと。

私は少し小さく小声で言つた。

「んな。」

由梨矢は口をぱくぱくしながら顔を赤めた。

「あはは。がばしょー。」

私は手をグウにして、ガツツポーズをした。

「うん。がんばる。」

由梨矢は苦笑いをして、ちょっと笑顔を混ぜて言った。

ガラツ

私は最後まで、人の心配だ。

ちょっと自分で自分にあきれた。

何で、私って、手に入れたいものをのがしてしまつんだろう？

私は胸が苦しくなった。

窓の外には雪。

ちらちら光りながら降つてく。

愛しい、悲しい、苦しい。

全部この雪にたくそつ、よし、かけてみよつ。

もし、私が手術をうけるときになつたときには雪が降つたら、私は助かる。

そして、ふらなかつたら、私は助からない。

「明日、由梨矢に言おう。」

私は泣きながら、笑顔で、窓の外を見つめた。

その頃由梨矢と厚樹は……

「ねえ、いいの？ 送つてもらつて。」

由梨矢は心配そうに言つた。

「ああ、大丈夫俺、男だし、金もってねーし、喧嘩なんて楽勝だし。」

厚樹は笑顔で何でもこいつて感じで、ポケットの中に手をいれた。

「そつ、それならいいんだけど。」

由梨矢はちよつと笑みをこぼして言つた。

「じゃあな。」

厚樹は帰るとして、振り返ったとき、由梨矢が止めた。

「ねえ、厚樹？」

「何？」

厚樹は振り向いて、聞き返してきた。

「あ、あの、前みたいに、私達……つきあわない？」

由梨矢は顔を赤くしながら言つた。

「……わりい、お前を守つてもいいけど、つきあいつことはできない、愛し合いつことはできない。」

厚樹は真剣な顔で返してきた。

「そ、そり…だよね。」

由梨矢は目をそらした。

「ああ。」

厚樹は顔ゆがめて言つた。

「ねえ、今言つたことは誰にも言わないでね？」

由梨矢は目を厚樹にむけて言つた。

「ああ。わかつた。後教えとくよ、俺の好きな人、あいつだよ。」

厚樹はちょっと顔をだしてるぐらいの霧が入院してる病院を指差した。

「やつぱりね。私わかつてたよ、霧が好きなんてこと、あんなに必死な厚樹みたことなかつたから。すぐわかつちやつた。」

由梨矢は無理矢理笑顔をつくつて、うつむきながら話した。

「やつぱり、わかつちまつだろ。俺顔とかに出でやつたちだから。」

厚樹は笑顔で少し顔を赤くした、由梨矢の気持ちも考えずに。

「厚樹の好きな人もわかつたことだし、家に入るね。」

由梨矢は作った笑顔で家のほうを指でさした。

「ああ、じゃあな。」

厚樹は何気に嬉しそうに話してて、由梨矢は胸がしめつけられた。

ガララ…

「おお、おかえり由梨矢。」

おばあちゃんが由梨矢に優しく言った。

「おばあちゃん、手に入れたいものが手に入んなかつたらどうすればいいのかな？」

由梨矢は泣きながらおばあちゃんに問いかけた。

「そつしたら、あきらめるか、あきらめないかのどつちかだね。」

おばあちゃんは由梨矢に優しく言った。

「え? どうなの?」

由梨矢は泣ながら首をかしげた。

「それは、自分の心で決めるんだよ。」

おばあちゃんは胸に手をあてて言った。

「……。」

由梨矢は少し黙った。

「まあ、時間は十分あるから、ゆっくり構えてのとこよ。」

おばあちゃんは顔をやせしめてやへよつて由梨矢に言った。

「うん。」

由梨矢はちよつと浮かない顔をして言い返した。

その頃私はずっと窓の外の雪をずっとみていた。

そのとき、いきなり病室のドアが開いた。

ビクッ

「さつきなぐられた俺だよ。そんなに好きなの？あの厚樹つていうやつのこと。」

入って来たのは貝都さんだった。

「ほつといてください！聞きました、あなたの話。由梨矢からしゃんと聞きました。もう、騙されませんよー！」

私は覚悟を決めた。

絶対にこんな人にまけないって。

「ほつ？じゃあ、体でわからしたほうがいいかな？」

貝都さんは田を猫のよつなするビニ田をして、何でもきつをくふうな田。

私は手が震えてきた。

そうだ、さつきみたいに誰も助けてくれないんだ。

「あれ？手が震ってるよ？怖いの？」

貝都さんは私に顔を近づけてきた。

私は田をそらす。

ガツ

貝都さんは私のあいをつかんで自分のほうに私をむかせた。

「これ、わかる？さつきあいつがつけた傷、こんなにあかくなっちやつたよ？どうしてくれんだよ…！」

貝都さんは私に怒鳴りつけてきた。

私は黙った。

歯をくいしばった。

ガツ

貝都さんは私の両手をつかんで窓に飛ばした。

(怖い！…誰か！…)

「ん…！…？」

私は貝都さんにいきなりキスされた。

「ん…！…」

(やめて！…！)

ゴクッ

私は何かを飲み込んだ。

フラッ

「誰か助けて。」

私はベットで倒れた。

「誰も来るわけないじゃん。」

貝都さんは私が倒れたときにそう言つた。

ガラツ

「ん?」んなとれ!...誰だ...よ?」

貝さんはドアのほうを振り向いた。

「はあはあはあ。何か嫌な予感がしてきてみたら、やつぱりこんなことか。」

入つて来たのは厚樹だつた。

「な、何で。お前また。」

貝都さんはあせりはじめてきた。

「もう一発なぐられてーんだな?」

厚樹は黒くしづんだ色の皿にして、指をせりせりとならしながら、言つた。

ଶ୍ରୀମଦ୍ଭଗବତ୍

貝都さんは逃げ出した。

「また、じんなにやらせられやがって。こつも、気楽に眠れやしねえよ。」

ギュッ

厚樹は私のことをギュッと抱きしめてくれた。

私はそのときは眠り薬を飲ませられてたからしらなかつた。

だた、眠り薬をのまされて夢を見た。

それは、厚樹に抱きしめられてた夢だつた…。

あつたかくて、大きくて、私のことを包んでくれる。

ねえ、厚樹、私つて厚樹のことが…。

ハツ

目が覚めた。

手があつたかい。

「厚樹？」

私は厚樹の髪の毛を少しだけ書き上げてぼんぼんと書いた。

「？あ、おきたか？」

厚樹は眠そうな顔で言つた。

「ずっとついててくれたの？」

私は握つてた手を少し強く握り締めながら言つた。

「ああ、そうだよ？お前が何か貝都つけてやつにやられそうだったから助けて、お前、眠り薬を飲ませてたから。」「

厚樹は片手で田をこすりながら言つた。

眠そつ。

「ありがとう。家はいって言つてたの？」

私は厚樹に言つた。

「大丈夫、ちゃんと、今日は帰れないって言つたから。連絡はひとつあるから。」

厚樹は私に優しく声をかけた。

「そう、よかつた。」

私は片手を胸にあててため息をついた。

ギュッ

私は手をつないでる方の手をちょっと力をこめた。

「なんかあつたのか？」

厚樹は言った。

私は横に首をふった。

「私、やつと気づいたの、私、厚樹のことが好き。」

私は思わず告白をしていた。

「あ、今のは忘れて、忘れて！」

私はハツとして、首を横にふった。

「忘れられるわけないじゃん。俺はお前のことが好きなの……」

厚樹は笑顔で言った。

「え？」

「好きだよ。俺も、お前のこと。」

厚樹は顔を赤くして言った。

「ゆでタコみたい。」

私は思わず本音を言ってしまった。

「てめ、人がせつかく告白してゐつての!」

厚樹はカチンときた顔で言つた。

「「めん」「めん。」つそつや。」

私は困つた顔で言い返した。

「田、つぶつて。」

厚樹はこきなり真剣な田で私に言つてきた。

「え?」

「いいからつぶれ。」

「うん。」

私は田をつぶつた。

私は口に何かやわらかくて、暑いものを感じた。

(うわ? 厚樹と囊が。)

由梨矢は口に手をあてながら見ていた。

それは、恋と悲しいことの始まりだった……

第六話

第六話

「……。」

私は黙り込んだ。

「……そろそろ時間だから学校行くよ。」

厚樹は腕時計を見て、言った。

「うん。」

私は笑顔で言った。

「また、学校が終わつたら来るから、待つてろよ。」

厚樹はカバンを持つて、振り向いて言った。

「うん。由梨矢と一緒に来てね。」

私は満面の笑顔で言った。

ガラツ・ピシャツ

「?何でいるんだ?」ここに、由梨矢が……。

厚樹はびっくりした顔で言った。

「霧の花あげようと思つて、来たんだけど……。」

由梨矢うつむきながら泣きそつな声で言つた。

「じゃあ、見てたのか？さつきの……。」

厚樹は由梨矢の顔を覗き込んだ。

コクン

由梨矢は小さくうなずいた。

「そつか…学校、一緒に行こいっせ？」

厚樹は笑顔で由梨矢のことを誘つた。

「うん。」

由梨矢はちよつとだけ顔をゆるめた。

私は窓を見た。

今日は雪が降つていない。

私はちよつと不吉な予感がした。

いきなりその痛みはきた……。

「痛い、誰か…。」

私は頭を抱えながら言つた。

私はナースコールをおして、看護士さんを呼んだ。

ガラッ

看護士さんが入ってきた。

「どうしました?！」

看護士さんは激しく、言葉を投げかけてきた。

「頭が…痛い…んですね。」

私はどぎれどぎれ言葉をつなげた。

「先生を呼びますんで、そのまま、がんばってください。」

私は看護士さんは言葉を投げかけて病室のドクター室につながる電話機をとつた。

「六　八号室の雪道さんが頭が痛いと頭をかかえています。すぐに先生、来てください…！」

看護士さんは先生にも、何かを投げているように私は聞こえてきた。

私はもつと頭が痛くなつてきて氣を失つてしまつた。

そこからは私は覚えていない。

ハツ

私は目を覚ました。

「私…ん？」

私は何か手にあつたかい感触を感じた。

「由梨矢。」

私は由梨矢に起きるつと言つよつて小さくしゃべつやついた。

「？」

由梨矢は目をこすりながら私をみた。

「あ、起きたんだ？ 大丈夫？ 調子は？」

由梨矢はすこし眼蓋がとろつとしていた。

「あのね、由梨矢、私ね？ ちょっとかけしてみよつと思つてね。」

私は由梨矢にちょっと浮かない顔で言つた。

「私が手術する日に雪が降つたら、私は助かる、で、雪が降らなかつたら、もう、命はないつて、かけてみようと思つて。」

私は頭のかきながら、照れて言った。

「うん、じゃあ、私、雪がふるように祈ってる。」

由梨矢はちょっと浮かない顔。

(何でかな?)

「あのや、ほかに言ひじゃないの? 厚樹のこととか。」

由梨矢はあることを知ってるかのように言った。

「え? ないよ? 何も。」

私は隠してしまった。

「そう。」

由梨矢はちょっとがっくりしたように言った。

「何かあった?」

私はうつむいてる由梨矢の顔を覗き込んだ。

「あのね、見ちゃったんだ。」

由梨矢は私の手をちらちら見つめて言った。

「厚樹と囊がキスしているところ...」

由梨矢はまたうつむきかえつて囁いた声で言つた。

「うん。」

私は口に手をのせた。

「「あん、ひれじぶりに花あざよいつと思つて。そじで、見ちゃつて。」

」

由梨矢は苦しそうな顔に変わつていた。

泣きそうな顔、涙が田にあふれそうに溜まつてて、私は苦しくなつてしまふがなかつた。

「「あん、うそなんかつにちやつて。」

「でも、私、あきらめないとこしたから、私達ライバルつてことで。」

由梨矢は今までにみたことのない、怖い顔を私にむけて、つきつけてきた。

由梨矢の田の視線はつきとれたみを感じるよいつな氣がした。

「え？」

私は驚いて目を丸くかためた。

「じゃ。」

由梨矢はその言葉を私の病室に残していった。

「そんな。」

私は思わず言葉にしていた。

私は泣いた、厚樹が来るまで泣き喚いた。

「るわこつて言われそなぐらしかすれていの声で、泣き叫んだ。

痛い、心が痛い。

心に折った傷というのは、凄く辛いものだったみたい。

ガチャッ

病室のドアが開いた。

厚樹が入ってきた、さつきあつたことを知らないので入ってきたときの声は軽々しかった。

心に折った傷はまだ、ズキズキと痛む。

ズキズキと…ズキズキと…。

「どうした? 目、赤くなつてんぞ?」

厚樹はうつむいている私の顔を覗き込んできた。

「なんでもないよ。」

私は厚樹に氣を使い何も、言えなかつた。

「なあ、皐月から、俺に告つたつてこと聞かなかつた？」

厚樹は思い出すよつて考へながら言つた。

ズキッ

私の心にとがつた氷が突き刺さるよつた感覚。

とがつた氷は冷たくて、硬くて、痛くて。

「俺、思い切つて言つちやつた、俺は靈が好きなんだつて。」

厚樹は何も知らなくて、能天気に話している。

痛い、氷が溶けてきたけどさつきおつた傷に染み込んで痛い。

「よかつた。私も、厚樹が好きだから。言つてくれてたなんて、す
ゞくうれしい。」

私は作った笑顔で、笑つて見せた。

きっと、厚樹はそういうてくれるのをのぞんでいる。

私はそつしか考えなかつた。

「やつぱり、作った笑顔してる。」

厚樹は私のほっぺを両側とももって、私の顔を真っ直ぐにみつめた。

厚樹の顔はすんだ黒い色をしていて、綺麗だった。

「ばれちゃった。」

さすがに私は涙を流していた。

涙が一粒零れ落ちた。

ポタッ

一粒病室のベットの上に落ちた。

頬を伝つ冷たさは、私の心をもつと苦しく締め付けてきた。

「痛いよ、心が痛いよ。」

私は耐えられなくなり泣き出してしまった。

そのとき、厚樹は私の背中を自分のまん前にさせて、ギュッと私の体を包み込んでくれた。

あつたかい。

気持ちが落ち着く。

私が少し落ち着くまで厚樹は私のことをずっと抱きしめていてく

れた。

私は厚樹の胸を少しおして、離れた。

「ありがとう、やっと落ち着いた。」

私はホッとした顔で、厚樹に言つた。

「よかつた。」

厚樹は私に笑顔で言つてくれた。

「でも、ちょっと話したい」と言つてさ。」

厚樹は頭を少しかきながら言つた。

「実は、囊の手術、明後日になることになつたんだ。」

厚樹はひつむきながら言つた。

「私はもう、覚悟は出来るから大丈夫だよ。」

私は真剣そのものの目で厚樹に言つた。

「そりか、じゃあ、大丈夫だな？」

厚樹は私の目をひょとだけ心配しながら言つてきた。

「うん。」

私は顔を真剣な顔にして厚樹に言った。

厚樹は笑顔にもどった。

「また、明日、来るから。」

厚樹は席を立つた。

「うん。また明日。」

私は厚樹に手を振つた。

ピシャッ

病室のドアが閉まつた。

私は歯を磨いて、やつたらと寝てしまつた。

翌日：

朝、私はぐつすりと寝ていたとき。

耳元で「ピロコロリン」という音がした。

私はびっくりして起き上がつた。

「ああ――――。」

横からひつむかへ聞こえた声、厚樹の声だ。

「うるせーー！一体何朝っぱらかい。」

私は寝ぼけまなこで厚樹に言葉を投げかけた。

「う、うめえ、起にして、実は寝顔の霊を『アメ』でとったくて……」

厚樹はしょぼんとした。

「え、じゃ、じゃあいいわよ、とっても、今から寝ればいいでしょ、起きたばっかなんだから。」

私は厚樹に言った。

「やつたー。」

厚樹は小さい子みたいにはしゃいだ。

(単純…)

私は心の中でうつつのでした。

私は病室のベットに横たわり寝ているふりをした。

私は唇にちよつだけ重みを感じた。

私は少し片目を開けた。

私が見たのは、厚樹が私にキスしていた。

「♪ロコロコロコー」「携帯の音がなつた。

私は目を開いた。

でも、唇の重みはかわらない。

アランジエタンシエターニッシュ

私の心臓の音は血管を通じて体中に伝へていく

フワッ

私の熱くなっている脣から、急にさめた空気が脣にふれる。

や」と
厚樹が私の唇から唇を話したんだ。

いいよ、起きても霧

厚樹は能天気に目を閉じて、私に語りかけて。

ひつくりした。

私は浮かない顔をして言った。

あはは、ごめん、ごめん、メールで、友達に送るね。

厚樹は血續をしたくてウスウスにしている

一 もうやめてよ。恥ずかしい。

私は顔を赤くして、照れながら言った。

「もう、送信しちゃつた。」

厚樹は舌を出していった。

私は厚樹の携帯を手にとつて確かめながら大声を出した。

「学校行つたらなんて言われるかな？」

厚樹は能天気な声で私に笑顔で言った。

すごい恥ずかしいんですけど！！

私は厚樹に叫んだ。

「『じめんごめん、まあ、多分今日は客が多いから。じゃ、学校に行つてきます。』

厚樹はイスから立ち上がりつて逃げ出した。

「ちよつ、まだ話終わつてな……」

私は病室のベットから立ち上がりうとしてスリッパをはいて、厚樹をおいかげようとした

۱۵

バタツ

私は倒れた。

足に「うまく力が入らない。」

「う…そ…でしょ？」

私は足を見た。

まひしてゐる。

「そんな、じゃあ、もう、外で歩けないの？」

私は口に手をあてて泣き出した。

冷たくて固い病室の床にポタッヒ一粒涙が零れ落ちた。

「何でよ…何で私なのよーーーー！」

私はふいてもふいても落ちてくる涙をふきながら、ずっと嘆いた。

誰か、私をこの世から救つて……

私は泣きながらそう思つた……

第6話（後書き）

次回、最終話です。

第7話（前書き）

ついにやめした最終話！！！

みなさん、気に入つていただけるとうれしいです。

第7話

最終話

私はまひしてうあごかない足をなでた。

「何で、動いてくれないの？」

私はまひして動かない、情けない足に聞いてみた。

当然足は何も言わない。

あたりまえ。

足がしゃべるなんて聞いたこともない。

あるわけがない。

けど、私はそのときだけしゃべってほしこと心から願った。

あるわけないのに。

「私は救われないのよね。結局は何も、生きてる価値なんて私にはないのよ。」

私は自分勝手にずっと言った。

言に聞かせる毎つ泣きじてこの言葉を繰り返した。

なにも、ない病室。

真っ黒なテレビ。

涙でいつぱいの目。

苦しきなる心。

この言葉を繰り返すたび胸が締め付けられて苦しきなる。

私は悪いことなんかしてないよ?何で私をこんなにしたの?神様
って、意地悪だね。

私をこんなにするなんて。

不公平だよ。

私は心の中でも、こんなことを考えていた。

結局、神様なんていないんだ。

私は運が悪いんだ。

だれも、助けられないこの病気、奇跡でも起きないかぎり私は助
からないんだ。

「誰か、助けて…」

私は再び泣き始めてしまった。

私は一時間ぐらい泣いていた。

ガラツ

十分ぐらいして、病室のドアが開いた。

看護士さんが入ってきた。

「注射をしにきました。」

看護士さんはいつも看護士さんだった。

「はい。腕まくわうね。」

看護士さんはいつもやさしい。

顔が美人で、スタイルよくて、いかにも看護士さんで、いつも、私の注射を担当している。

男は一気にホレちゃうそうな性格つて感じ。

でも、それは表の顔で、裏は絶対違う。

「はい、終わりました。」

看護士さんは顔を笑顔に変えて綺麗にみがかれた白い歯を見せる。

「ありがとうございました。」

私はまくったパジャマのそでを直しながら言った。

「いいえ。」

ガラガラガラ…

ピシャツ。

看護士さんは人事のように病室を出て行った。

あの笑顔だつて、人事。

結局自分の担当だから。

私は全部考えることがマイナスになつていった。

そのたびそのたび胸が苦しくなつた。

考えることが全部マイナスなんてなつたことがなかつたから。

辛くなつた。

私はもう足が動かなくなつたことで見るもの全部が絶望に変わつた。

また私は泣き出した。

私は三時ぐらいまで泣いていた。

「こんなに泣いたのは初めて。

昔は私は泣き虫なんかじゃなかつたのにな。

私は一瞬そう思い出した。

ガラツ

「もう、いいよ。そんなに辛いことなんて考えないでよ。」

由梨矢がいきなり泣きながら病室に入つてきた。

「由梨矢。何で？学校は？」

私は涙でいっぱいの目で由梨矢を見た。

「学校は休んだ。てゅうかサボり。」

由梨矢は泣きながら笑つた。

「え？ なんで？」

私は由梨矢に尋ねた。

「ずっと外から見てた。厚樹と霧がキスしてるとこから。」

由梨矢は泣きながら落ち込んだ。

「ずっと霧が苦しんでるところをずっと見てた。涙が止まらなかつた。」

由梨矢は涙をこぼしながら私の手に手をのせってきた。

「私はずっとみてきたよ。霧が傷ついてるのを、ずっと見てきたよ。泣いてるのを見てきたよ。ごめんね、昨日は」「ごめんね。」

由梨矢は泣きながら言った。

「大丈夫だよ、昨日のことのはなしにしてあげるから。心配してくれてありがとう。」

私は泣きながら由梨矢に優しく言った。

「「「めんね、」「めんね、」「めんねー」

由梨矢は泣いて私にあやまつた。

「いいんだよ。」

私も泣きながら、由梨矢のことを許した。

「ありがとう。」

由梨矢はその言葉を残して私の病室のベッドに顔をつけて泣いた。

私も一緒に泣いた。

声がかかるるまで。

目が痛くなるまで。

息が苦しくなるまで。

ずっと、泣いた、由梨矢と一緒に。

泣いて…泣いて…泣いた…。

私と由梨矢はもう、涙が出なかつた。

ぼーっとしていた。

何も考えずに。

ガラツ

いきなりドアが開いた。

入ってきたのは、厚樹とクラスメートの男子と見たことのない男子達だつた。

「よつ、こいつらがどうしてもつていうから連れてきちまつたよ。」

厚樹は顔をニヤニヤさせながら言つてきた。

「ん? 目、赤くなつてね? 霧。」

厚樹は泣いてて赤くなつた目を見つめてくる。

「大丈夫。」

私は厚樹の目線をそらしながら言った。

「皐月もじゃねえか。大丈夫か？」

厚樹は由梨矢の目を少しだけ見つめて言った。

「大丈夫だよ。心配しないで、厚樹は霧の彼氏なんだから、私にそう言つてると霧が怒るよ？」

由梨矢は髪をすこしかきわけて言った。

「そうか？それならいいんだけど。」

厚樹はちょっとと考えているように言った。

「おおー！」の子が厚樹の彼女？ 可愛いー超可愛いじやん！俺持ち帰
りてーー！」

知らない男子が私に抱きついてきた。

「ちょっと、霧に触るなよ！」

「霧ちゃんつていうんだ。可愛いね。」

厚樹はいそいでその知らない男子を引き離した。

もう一人の知らない男子が私に声かけてきた。

「ありがとうござります。大げさすぎですよ。」

私は少し、落ち着いて知らない男子達に言った。

「いいなー。こんな可愛い子ー。うばーいー。」

知らない男子の私に抱きついた男子のほうが言つてきた。

(まだ言つか…。)

私は心の中でそう思つた。

「ありがとーいります。」

私はいやいや声を出した。

「それにしてか、お前らが付き合つてわ思わなかつたよ。」

クラスメートの男子が言つてきた。

「やう?」

私は疲れぎみに言つた。

「うん。メール見たときほびっくりした。」

クラスメートの人人がまた言つてきた。

「ああ、今朝のメールか。女子達には言つてないよね?」

私は厚樹に聞いてみた。

「ああ、女達には送つてないけど。」

厚樹は言った。

「そう。」

私は元気なさげに言った。

「で、その隣の子は？」

知らない男子達由梨矢のこと指でさした。

「ああ、皐月由梨矢って言って、俺の元カノで、霧の親友。」

厚樹は軽々しく説明した。

「へー、お前、どうちも可愛い子とりやがつてー。うぜー。」

知らない男子達が厚樹をせめる。

由梨矢はちょっと浮かない顔をしている。

「大丈夫？由梨矢。いやでしょ。言われるの。」

私は小声で由梨矢に言った。

「クンッ

由梨矢は小さくうなずいた。

一回だけ、柔らかく。

私は由梨矢の頭をポンッと軽く叩いた。

「ありがとう。」

由梨矢は小声で私にお礼を言った。

私達はしばらく厚樹達の楽しそうなところを見ていた。

遠い田で。

遠くを見るよ！」。

だつて、何故か、遠くに見える。

あんなふつに私は楽しむことができないから。

ポタッ、ポタッ、ポタッ…

私はまた泣き出してしまった。

「霧。」

由梨矢は私の心の声がわかつているみたいに私の手を握ってきた。

「何でかな？ 何で？ 私がこんなめにあわなきやなんないのよ。」

私は厚樹達に聞こえないよう小声で由梨矢だけにこの気持ちを伝えた。

「大丈夫だよ。私がいる。」

由梨矢は私が泣いてるのを隠してくれた。

そして、優しく言つてくれた。

神様なんていない。

この世にいないんだ。

手術当日…

私は朝早くから起きてしまった。

私はテレビをつけた。

天気予報を見た。

「今日は雪などはふらないでしよう。」

私は心にグサッと傷ができた。

頭の中をかけめぐつた。

「うそ… でしょ? うそでしょ? そんな…!」

私はテレビに近づいた。

涙が出てきた。

今日の手術は……失敗……？。

ガラツ

由梨矢が入ってきた。

「こんな朝早く」「どうしたの？」

私は涙をふきながら言った。

「どうしたのじゃないわよ。どうするの？」

由梨矢も心配して朝早く起きちゃつたみたい。

「どうするも、どうするも、厚樹のお父さんにまかせる。」

私は泣きながら言った。

「そう……そうしかできないもんね。私は雪が降るよう願つてみる。」

「

由梨矢はそつと、イスに腰をおろして。

私の手をギュッと握り締めた。

「ありがとう。」

私は笑顔で由梨矢に優しく言った。

私と由梨矢はずっと手を握り締めていた。

「死んでも、親友でいてね。」

私は由梨矢に泣きながら言った。

「うん。ずっと、親友だよ。」

由梨矢は私に優しく言ってくれた。

「ありがとう。」

私は由梨矢に言った。

ガラツ

「そろそろ移動するわよ。」

お母さんが病室に入ってきた。

真剣な目。

きりつとした背筋。

すぐお母さんとは思えないほどシャキッとしていた。

「うるさい。」

私もまけなによつにシャキッとした。

ガラツ・ペシャツ

病室のドアは閉まつた。

私は病院を出た。

タクシーに乗り込んで由梨矢にバイバイをした。

「後で、行くからね。」

由梨矢は笑顔で言つた。

「うん。待つてる。」

私は手をふりながら言つた。

「じゃーねー。」

由梨矢も手を振つてくれた。

「じゃねー。」

私も手を振つてからタクシーが動き始めた。

これから私は運命の分かれ道にたどりつく。

どっちなんだろう?私の運命は。

生きれるのか、死ぬのか、どっちなんだろう?

厚樹のお父さんの病院について。

「よう。」

厚樹が待っていた。

「厚樹。」

私は抱きついた。

「どうした？今日は一段と女の子らしきじやんか。抱きついてくるなんて。」

厚樹は私にむかって言った。

「だつて、最後になるかもしれないじやん、だから。」

私は笑顔になつて厚樹に言った。

「最後なんて言わせねえぞ。俺の父さんに頑張つてたのんだから、父さんは絶対助けてくれる。」

厚樹は私に覚悟を決めたみたいな顔で言つてきた。

「そりかな？」

私はいやなふうに厚樹に言った。

「ああ。絶対だ。まけそつになつてもまけんなよ？」

厚樹は私のおでこにパンツをした。

「いて。わかつたよ。がんばるよ。」

私は泣きそうになつてゐる顔を隠しながら言った。

「ちょっと、一人だけの世界になんないでくれる？」

後に由梨矢とクラスメートの全員がいた。

「みんな。来ててくれたんだ。」

私は明るくみんなに笑顔を見せた。

「がんばって。囊！」

由梨矢は私にむかつてガツツポーズを見せてくれた。

「うん。」

私はきらきらさせた目を由梨矢にむけた。

由梨矢が心配しないように。

自分では辛い気持ちがいっぱいあつた。

自分は怖くなつた。

でも、由梨矢達に心配させたくない。

「がんばっていってくる。」

私は診察室に入った。

私は診察室に入つて、診察をしてもらい。

病院のベットにねつこうがつて麻酔をうつしてもらい。

手術室に入った。

私は眠っている。

でも、何かしら思いが私の頭に飛んできた。

頭の中をかけめぐっている。

その言葉は由梨矢と厚樹といつ言葉だった。

由梨矢、厚樹、私は絶対に戻つてくるよ。

絶対に。

だつて、こんなにいっぱいの人気が私のことを応援してくれてるんだから。

その頃由梨矢達は…

「霧、大丈夫だよね？まさか、死んじゃつたりしないよね？」

クラスメートの女子が一人言ひてきた。

「そんなのあるわけないじゃん！絶対に戻つてくる…！霧は絶対に帰つてくる！」

由梨矢は病院に声を響かせる。

「そうだよ、俺達が応援してやんなくちゃ意味がねえじゃんかよ！…！」

厚樹は真剣に言つた。

「そうだね。何のために来たんだかわからなくなっちゃつたね。」

女子一人が言つた。

「応援するぞーーー！」

厚樹が大声で言つた。

『おおーーー！』

みんなの声がたちまち病院の中に響いた。

手術室にもこの声は響いた。

「がんばるんだよ、雪道さん。絶対、元気に戻つてくれるんだよ…！」

先生」と厚樹のお父さんは私に投げかけた。

私に応援の声を。

聞こえるよ、みんなの応援してる声。

私はずっとその言葉を繰り返し聞いていた。

いろんな思い出があつたなー。

もつと、作ろう。

いろいろ思い出を。

その頃由梨矢達はといふと…

由梨矢は窓を見て何かを願っていた。

(お願い。雪降つてよーお願い、霧が助かるよつじ。)

「何祈つてるの?」

厚樹が由梨矢に聞いた。

「雪が降るよつじ。」

由梨矢は窓の外を見ながら厚樹に答えた。

「何で?」

厚樹は由梨矢に首をかしげながら聞いた。

「雪が降れば霧は助かるかもしれないの。」

由梨矢は願いつつ厚樹に答えた。

「どうゆう意味？」

厚樹はきいてくる。

「しつこいな。しょうがない。あのね、今、霧がかけをしてるの、雪にいっぱい思い出があつて、雪がふれば助かる、雪が降んなれば助からない。そう、かけをしてるの、私は助かるように雪が降るように願ってるの。」

由梨矢は窓の外を見ながら願い続けた。

「わかった。俺も願う。」

厚樹も窓の外を見て願った。

雪、降つて。

雪、降つて。

雪、降つて。

「うそ？！」

由梨矢は窓の外を見て驚いた。

「マジで？！？」

厚樹も窓の外を見て驚いた。

驚くのもあたりまえ、だつて、本当に雪が降つてゐるんだもの。

「今日は晴れつて言つてたのに。すごい。助かるかもしれない、霊。

」

由梨矢は目をウルウルさせて言つた。

雪は桜みたにチラチラと落ちていく、キラキラと光ながら。

ゆづくり、落ちていく。

私は聞こえたような気がした。

何がつて？それはね、由梨矢と厚樹の声だよ。

きつと助かるよーつて、由梨矢と厚樹が私に言つてくれたような
き気がしたの。

いや。

絶対に言つてくれた。

たちまち光が差し込んできた。

「ん？」

私は目を開いた。

「起きた！起きたよ、みんな！霊が起きたよ。」

聞こえてきたのは由梨矢の声。

みんなを起こす声。

「よかつた。霊、生きれるよ。」

由梨矢が泣きながら、私に言つてきた。

「私、助かったの？」

私は信じられない」とを言われて、びっくりしながら聞いた。

「うん。助かったんだよ。生きれるんだよ？…」

由梨矢は涙をふきながら笑顔になつて言つた。

「生きれるんだ。生きれる。」

私は涙があふれ出た、泣いてしまった。

「よかつた。」

みんなまで泣き出してしまった。

でも、私は生きれるよ'になつた。

手術は成功。

厚樹のお父さんは私の難しい手術を成功させて、医者のランクが上がつた。

厚樹のお父さんは有名になつた。

その後中学二年になり、厚樹は医者をめざして、勉強中。

あんまりテートはできないけど、いつも、勉強は厚樹と一緒にやつてるから、あんまりつまらないわけではない。

一生懸命な厚樹を見るとなんだか楽しくなる。

私もちゅうとだけ高いランクの高校を目指している。

だから、こつも一生懸命勉強をしている。

由梨矢は今彼氏と同姓しているでも、ちやんと勉強はして高校は行くらしき。

今は彼氏さんと仲よさげだとか。

メールのやつとつてしまふこと。

時々あこに行く時はあるけど。

すじくたのしゃべり。

私達は明日へとがんばって生きている。

みんな人それぞれ生きていく。

そして、いろんな道に進んでいく。

バタバタバタバタ…

私は一回におりていぐ。

「お母さん、行つてきまーす。」

ガチャッ

私はドアを開ける。

ドアの前には厚樹がいる。

みんなも、将来の扉を開けていくんだ。

第7話（後書き）

読んだついでに感想も書いてくれるととてもうれしいです。
てゆうか書いて！！
とゆうことで・・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5173c/>

雪

2010年11月5日14時32分発行